

牛久沼の岸辺で白の想像力を書き記す人
『市川つた詩選集一五八篇』に寄せて

鈴木 比佐雄

1

私の暮らす千葉県柏市から国道六号線を茨城方面に車を走らすと一時間足らずで牛久沼が見えてくる。車からこの沼を見るといつもなぜか静かな心持ちになる。それはこの沼には河童が棲んでいるとか、牛にされた怠け者のお坊さんが入水したとか、民話的な伝承が残っているからだ。また水辺に鰻店が並んでいて入ってしばらくゆっくりしたい衝動に駆られるのは、うな井発祥の地がこの牛久沼周辺の店だったといわれているからだろう。二十世紀の初め頃には、牛久沼には日本画家で俳人の小川芋銭が暮らしていて、河童の絵を描いていた。牛久市に入ると芋銭の記念碑の標識が六号線からも見えてくる。市川つたさんはそんな牛久沼周辺の牛久市に暮らしている詩人で、二〇〇八年にコールサック社が刊行した『生活語詩二七六人集山河編』に詩「牛久沼」で参加してく

れた。市川つたさんを思い浮かべると、真っ先にその詩「牛久沼」が想起されて、小川芋銭の河童の絵から触発された郷土を愛する精神性を感じる。その詩を引用してみたい。

牛久沼

十年ほど前ここの牛久に転居して来た
転勤族だった私たちは
子供にどっしりとした故郷を
与えられなかった

故郷をちぎれ千切れに持たせ
親の故郷は子供の故郷ではなく
職場近くを息子たちは
故郷に選んで住み着いた

河童の郷を終焉の地として居を移した老夫婦
牛久大仏牛久シャトウいくつかの

名所見どころ 橋のない川 芋銭の河童
沢山の故郷自慢を探し求めて

河童の像が何匹も座し 立ちして
沼は底深く河童の街を潜めて
あの世とこの世の隔たりのように
静まって想いを通わせてくる

何となく人に横したおかしげな像
笑えない悲哀なども隠して人つぼく
つい声を掛けたく手を触れなくなる
架空の動物とは言い難く隣人と呼ぼう

お前の心を掬って私の心に通わす
河童よ何時までも牛久の街に住み続けて
世の中みんなが幸せであるように
見守っていて欲しい

菖蒲が葉を繁らせメダカが沢山泳いでいる

河童の村は春ですか 鰻に鯉に鯰など
跳ねて泳いで元氣一杯ですか
春は一段と河童踊りで賑やかでしょう
沼のほとりは桜が満開
胡瓜を持って片足上げたおどけた河童よ
桜の許で人に混じって花見の酔いに踊っている
その陽気な小父さん あなたもしや河童様では

この詩の感動的なところは、エコロジイの先駆者でもあった小川芋銭の河童の世界に市川さんが今も心を通わせていて、牛久沼の自然とともに生きようとしていることだ。市川さんは花見で酔っ払っている小父さんを河童の化身のように思ってしまうほどユーモアがあり、しなやかな想像力に満ちている。市川さんは牛久市周辺の生まれでなくお子さんとの同居がきっかけで牛久に住むことになったそう。きっと市川さんはこの詩を書きながらこの場所を終の棲家と感ずるようになったのではないだろうか。その後も市川さんは今回の詩選集にも収めら

れた『大空襲三一〇人詩集』に詩「老夫婦夜話」、『鎮魂詩四〇四人詩集』に「重い荷物」、『命が危ない 311人詩集』に「地球が危ない」、『脱原発・自然エネルギー218人詩集』に「絶滅と創造」などの詩篇で参加してくれ、切実な現実の課題にも挑戦し積極的に書き記してくれたのだった。

2

市川さんは一九三三年に静岡で生まれた。敗戦の年には十二歳の少女であった市川さんは、第三詩集『小さな花束』の中の詩「私の六十年」によると「夜中に飛び起きる空襲もない／敗戦をこっそり喜ぶ少女でありまして」と語っている。しかしながら後に大人になるにつれて、戦争中の多くの死者たちのことを自分にひきつけて考え始めたのではないか。「終戦」ではなく「敗戦」と明確に語り、その死者たちの無念な思いを市川さんはどこか掬い上げて詩で語ろうとしているように考えられる。市川さんの詩に深みと広がりを感じるのは、そんな時代に翻弄されて歴史の陰で忘れさられていく民衆の無念の

思いを自己を通して記しているからだ。市川さんの詩の特長は、身近な人間や事物に素材を取りながらも、内面に湧き上がる真実の声にいつも耳を澄ましていて、人間が生きていく不可思議さに挑戦する詩篇を創り出そうとしていることだ。一九八六年に刊行された第一詩集『赤い花一輪咲きますよう』は、五十歳を過ぎてから刊行されたものだ。この詩集に二〇〇篇近くが収録されていて、その後の市川さんの詩の中心的なテーマである生と死の問題が記されている。その第一詩集から今回の詩選集に二十四篇が収められていて、その中から「瞳について」を引用する。

瞳について

赤い瞳が赤い瞳の中に赤い瞳をもつて
私をとりまく

隙があれば食い込もうとして

そんな恐怖が 私を脅かす夜

姉さん あなたにその声が聞えますか

巨大な瞳 その中に俘囚になった一人一人の
石像の顔

私の前に無数につらなる

赤い瞳のうす笑い

みの虫のような孤独をもち

永遠に通ずるような

蛇の通った白い道を

指さしながら

巨大な瞳の中に住む宇宙

おしまいは悲しみを

石像の祈る姿にかえて

わからないのに 宗教の衣の下にかくれて

天の重みをさけている群衆

姉さん 私は私の土まんじゅうを作る為に

赤い瞳を数えて行けばいいのでしょうか

しかし目をつぶる石像のような兵士たちの多くの顔が金の砂浜から現れてくる香月泰男の絵は、「巨大な瞳その中に俘囚になった一人一人の／石像の顔」というイメージに照合している。ただ違うところは「赤い瞳が赤い瞳の中に赤い瞳をもつて」と「石像の顔」に市川さんは、「赤い瞳」を想像して、その瞳から見詰められているのだと感じている。この死んでいるか、眠っているか分からないが、国家に翻弄された兵士たちの悲しみを受け止めている。市川さんがコールサク社の一連の戦争と平和を考える詩選集に参加してきたのは、戦争の犠牲者たちの「赤い瞳」の悲しみを決して忘れていないからだろう。

第一詩集にはまた「遠い瞳をして」という詩もある。

遠い瞳をして

主婦として最小限かせない家事をやり

母として最大限 子を放任し

女としてやむをえない限りそっぽを向き

私はこの詩を初めて読んだ時に、シベリア抑留者の画家香月泰男の絵画を思い浮かべてしまった。市川さんが香月泰男の絵に影響を与えられていたかは定かではない。

人間として欲ばりなほど我を通し
感傷いっぱい あこがれいっぱい
好奇心には勝てず

少しニヒルで諦念的で
鱈の頭でもすぐ信じてしまいとらわれず
嘘をつくのが下手で
だますよりだまされた方がましで
着かざっている人より
かえって質素な人に畏れを抱き
あなたの肩越しに いつも遠い瞳をし

花屋さんの店先ではちよつと立ち止まり

本屋さんでは文庫本の一冊も買い

時間をもてあます時には

虹色のシヨールを編む

そんな主婦でありたい

この詩を読んでいると、市川さんが主婦業をこなしながらも、自覚的に詩的な時間を日常の中に自然に生み出

となってきたことがわかる。第二詩集『白い心象画』の中でタイトル詩「白い心象画」と詩「白」の二篇がある。これらの詩篇には市川さんの感受性のありかを示している興味深い。

白い心象画

光のゆくえ
水のゆくえ
僅かなもののさざめきを
手渡され 受けつがれて
「反応し 消滅し
育まれたすえ枯れて行く
すみれいろの浸潤^{しじも}

はるかなるものの

どよめき

さざめきが

田園に描く

している様がわき上がってくる。多くの女性詩人が結婚、出産、子育て、介護などで時間を取られて筆を折ってしまうことがある。この詩を読むとそんな困難を抱えた女性詩人を応援するエールのような詩だと思えてくる。また一人の人間に限られた時間の中でより良き豊かな時間を過ごそうとする人生の深い知恵を感じさせてくれる。宮沢賢治の「雨ニモマケズ」のフレーズを意識した詩篇でもあるが、市川さんが賢治の精神を自分にひきつけて生きようとする試みであったのだろう。

3

市川さんは結婚後に中部地方の新潟、長野などを夫の仕事の関係で十数回も転居したという。その間に子育てをしながら地域の絵画教室や詩のサークルに入って絵を描き、詩を作り続けてきた。多くの土地で暮らし、また新たな土地にまっさらな気持ちで馴染もうとしてきた市川さんの生活には、絵画制作と詩作がなくてはならないものだったのだろう。それらの創作活動を通じて知り合った友人たちとの交流もまた市川さんにとって励み

白い心象画となる

市川さんの世界観は、白で始まり白で終わる白い心象画なのかも知れない。光も水も白でありながら、そのゆくえは様々な色に染まり汚れてしまうけれども、「はるかなるもの」となって「どよめき／さざめき」、いつしか「白い心象画」となるという。きっと市川さんはまっさらな白になりたいために、絵を描き詩を書くこととしているのだろう。市川さんの詩に無償で物事に執着しない精神性を感じるのはきっと「白」が根底にあるからだろう。詩「白」も引用してみる。

白

やさしくて冷たくて虚ろで優雅で
白で描かれた一枚の心象画
雄々しさも底力も
一つも主張していないのに
しっかりと抱きかかえておまへは在る

温かさを欲するおまえに
黄と朱と紫と蒼をさらって自由に舞う
寂寥のように

風のように
花のように
叢のように
うたのように
流れのように
日常のように
死のように
眩白でかかれた一冊の詩集のように

この詩「白」は、はるかな根源に白があり、そこからあらゆる存在物の姿形や色が生まれて、数多のドラマの果てに「眩白」で書かれた詩集を生み出したという、市川さんの願いが込められている。ブラックホールではなく、ホワイトホールのようなイメージを市川さんは語っている。市川さんの詩には、多様な色彩感覚が際

立っているのは、いつも白がベースにあるからだろう。

4

一九九六年に刊行された第三詩集『小さい花束』でも白への独特な感受性が、ところどころに垣間見える。例えば詩「すすきの穂は」では、「すすきの穂は／白い刷毛／お化粧しているお月様の／頬をほく 白い刷毛」などのように夜空にのぼる月をすすきの穂が、刷き磨いていると記している。

一九九九年に刊行された第四詩集『刻をつなげて』では、詩「習作（デッサン）」で「白と白を重ね／温かい白 拒否の白／かげりの白 とおい白／白の中の白で汚れていく裸婦よ」と語り、詩と絵画で白にこだわる市川さんの課題を浮き彫りにしている。

二〇〇三年に刊行した第五詩集『一本の樹木』では、詩「詩の森」が「薄暗くもあり／蒼穹ちやまかぜでもあり／白い闇でもあつたりする」といい、そして「詩の森をさまよう／さまよって燃えるような人目に遇おう」と自らの詩的世界「燃えるような人目」になぞらえている。

二〇〇四年に刊行した第六詩集『回遊』では、詩「故郷を移植する」の冒頭で「古里を捨てたのではない」といい、「孫たちの古里造りに参加し／私達の終焉の地として／新しい古里を育てる」と語る。私にはこの市川さんの「新しい古里」造りに挑戦することが、爽やかで真っ白い精神性として感じられるのだ。市川さんの「古里を移植する」という言葉がなぜカリアリティを持ち始めるのは、市川さんの生き方に嘘がないからだろう。その意味で「回遊」もまた「故郷を移植する」ことなのだ。

同じ二〇〇四年に刊行された第七詩集『風を抱く』にも、詩「白」があり、「白い闇 白い沈黙 白い円還／白に縋め捕られて／白が見えない」と白との格闘が継続されて、生きるとは白への問いを市川さんがひたすら生きているかのように感じさせてくれる。

そして二〇一一年に刊行された第八詩集『白い闇』では、白への問いが「白い闇」の問いへと標準が絞られてきて、市川さんの詩作の魅力がより深まってきた。

また二〇一二年に刊行された第九詩集『つれづれ想』の詩「白い宴」では、白いティーブルクロスの上で練り広

げる宴から、食べることに憑かれる人間存在の虚しさを暗示している。

最後に詩「白い闇」を引用してこの小論を終えたい。初源の白が反転して、最後の「白い闇」へと続いていく不思議さに挑戦していく市川さんは、これからも詩作を継続していくだろう。そんな「白い想像力」への試みと達成を多くの人びとに読んで欲しいと願っている。

白い闇

文章を書いていると闇に閉ざされる
白紙の中から立ちのぼって
頭内を白い闇に占領され
麻痺を起こして子供っぽく赤い舌を出す

本を読んでいると
透明な闇に取り囲まれる
筋道に立ちほだかって
向こうの景色を霧の中に隠してしまう

忘れっぽくなったり

思い出せなくなったり

白い闇はまだ前方にいるから

懸命になればなる程思い知らされる

名前も顔も覚えたつもりが

いつか消え何処かに紛れ出てこない

物忘れも 春霞か夜霧か

心地よくたなびいているのがいい

たなびく もやう つつむ かくす わすれる

何と優しい言葉だろう

年齢を重ねて味わう言葉だから

かるやかに指先に結び付けている